

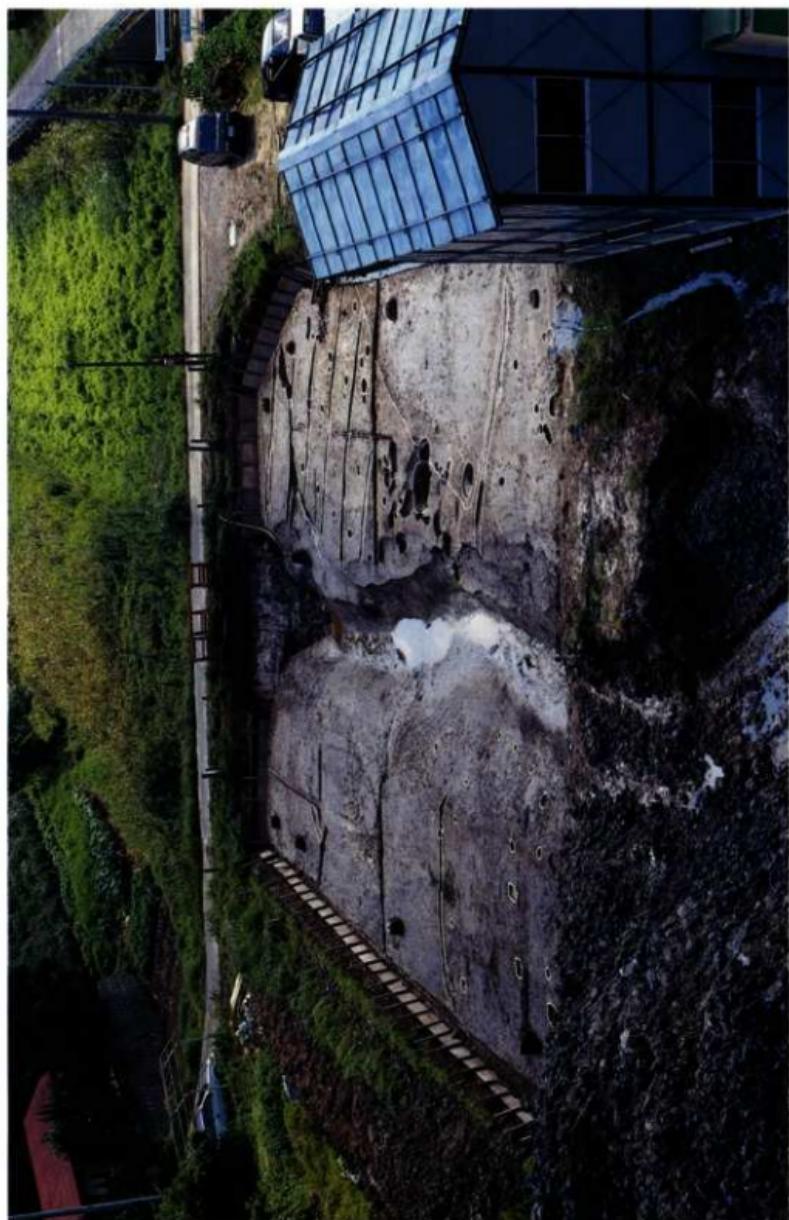
菊川町埋蔵文化財報告書第33集

ほつたひがし
堀田東遺跡発掘調査報告書

1995

静岡県菊川町教育委員会

卷 頭



例　　言

1. 本書は、平成6年8月9日から10月5日にかけて実施した静岡県菊川町西方字寺田1080-2ほかに所在する堀田東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査を行なうに至った原因是、周知の遺跡において宅地造成が計画されたためである。調査に要した費用は、朝日住宅株式会社が負担した。
3. 発掘調査は、菊川町教育委員会が朝日住宅株式会社より委託を請け実施した。

調査主体　菊川町教育委員会

作業員　小林好子 栗田敏子 杉田孝江 杉山花江 野中秋子

福井京子 堀内初代 山田洋子 丸尾安代 横山みさを

井指秋雄 井指辰雄 高岡三郎 中野泰弘 服部喜三郎

長谷山寅男 山川加知夫

赤堀暁美（花園大学学生）雪山恭子（近畿大学学生）

整理作業　尾東寿子 水谷由美子 長谷山敏男

4. 本書の執筆は、土器を塚本和弘が、これを除く執筆と編集を後藤和風が行なった。
5. 遺物整理および実測図・挿図作成は松井由美子、堀内初代の協力を得た。
6. 遺構・遺物写真は、塚本が撮影した。
7. 本調査および本書発刊に関する事務は、菊川町教育委員会生涯学習課が行なった。

菊川町教育委員会　教育長　鈴木　静夫

生涯学習課　局長兼課長　横山　守　孝

振興係　係長　石川　睦　美

文化財　調査員　塚本　和　弘

　　調査員　後藤　和　風

事務　臨時　西野　洋　子

8. 実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。

9. 石器・石製品の石材鑑定は、古田哲章氏（常葉学園菊川高校）に依頼し、ご教示を賜った。

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
調査に至る経過	
調査の方法及び経過	
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	8
層 位	
遺 構	
遺 物	
第IV章 ま と め	23

挿 図 目 次

第1図 位置図（1 : 2,500）	1
第2図 グリッド配置図	4
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡（1 : 10,000）	7
第4図 土層模式図	9
第5図 南壁土層図	10
第6図 全体図	11
第7図 S E - 1 実測図	12
第8図 S H - 1 実測図	13
第9図 水田遺構実測図	15
第10図 出土遺物実測図 1	17
第11図 出土遺物実測図 2	19
第12図 出土遺物実測図 3	21
第13図 出土遺物実測図 4	22

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧表 6

図版目次

卷頭 調査区完掘状態

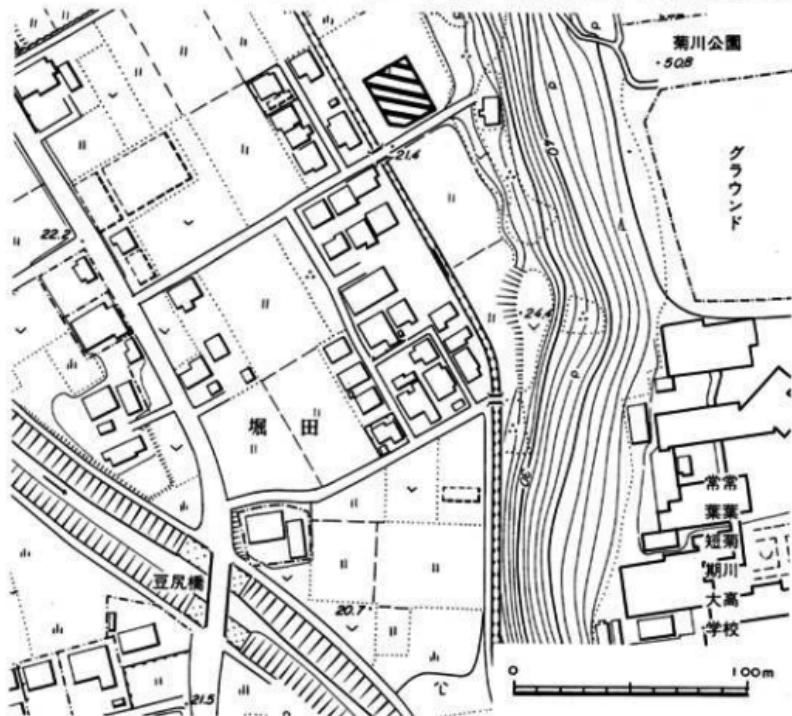
- | | |
|----------------|--------------|
| 図版1 完掘状態 | 発掘作業風景 |
| 図版2 S H - 1 完掘 | C 2 区内柱穴 |
| 図版3 水田遺構 | C 3 区内溝 |
| 図版4 B 2 区内柱穴 | S D - 1 土層状態 |
| 図版5 出土遺物 1 | |
| 図版6 出土遺物 2 | |
| 図版7 出土遺物 3 | |
| 図版8 出土遺物 4 | |
| 図版9 出土遺物 5 | |
| 図版10 出土遺物 6 | |

第Ⅰ章 調査の経過

調査に至る経過

静岡県は一年中温暖な気候で住みやすい地域である。菊川町は、そのほぼ中央に位置する。JR菊川駅や東名菊川インターチェンジをはじめ、近年は牧之原、掛川インターチェンジの開設や新幹線掛川駅の開業など交通網の整備が急速に進められている。今後も牧之原台地の一角に静岡空港の建設が、小笠山丘陵では総合運動公園などの整備が計画されている。有数の開発事業が急ピッチで行なわれている。

こうした基盤整備が進むなか、菊川町でも工業団地の建設や商店街の活性化が進み、宅地分譲等の民間開発が増加傾向にある。西方地区では、丘陵部を切り開いて造成された緑ヶ丘団地ばかりではなく、沖積平野にまで宅地化の波が押し寄せている。こうした中、開発に伴う文化財の取り扱いに関して、十分な調整が行なわれず、問題が生じ



第1図 位置図

る事例も見受けられる。急増する開発行為は住宅需要とも不可分であるが、文化財の取り扱いをめぐって慎重な対応が求められる昨今である。

平成5年11月9日付けで文化財所在の有無について、あけぼの開発株式会社名で照会書類が教育委員会に提出された。書類によると、計画は菊川町西方1080-2番地ほかに住宅地を造成しようとするものであった。計画区域は周知の遺跡である堀田遺跡と隣接するため、早急に文化財の取り扱いについて協議するよう同年11月12日付け菊教第680号であけぼの開発株式会社に回答した。

これを受けて、同年11月14日付けで朝日住宅株式会社より町教育委員会に確認調査の依頼があった。確認調査を実施したところ、開発計画範囲内に遺跡があると判断された。そこで同年11月29日付け菊教第706号で文化財の取り扱いについてすみやかに協議を行なうよう報告した。その後、朝日住宅株式会社と町教育委員会で協議し、開発前に発掘調査を実施して記録保存することになった。

朝日住宅株式会社は、菊川町教育委員会に発掘調査を依頼するとともに平成6年7月1日付けで文化庁長官あてに文化財保護法57条2項に係わる埋蔵文化財発掘の届け出を提出した。そして菊川町教育委員会と朝日住宅株式会社の2者で発掘調査のための費用や期間、そして体制について協議を行なった。

町教育委員会は、当初計画にない緊急な事業であったため、他事業の進捗状況にも配慮した慎重な取り扱いを踏った。しかし町内の住宅需要に応えるための開発行為でもあるため、急遽施工である朝日住宅株式会社との間に平成6年6月13日付けで契約を取り交わした。

現地調査は、強い粘質の土壌に阻まれ、予想以上に精査や掘削に労を要した。また、遺構の検出も比較的困難だった。このため、当初計画よりいくつ調査期間を延長し、平成6年8月9日から10月5日の約2ヶ月間となった。県教育委員会の指導のもと、町教育委員会が主体となり実施した。整理作業は平成7年1月30日までに完了した。

調査の経過及び方法

経過

- 平成6年8月9日 機械による表土除去作業を始める一方、プレハブを建設し電気布設工事を行なう。発掘器材を搬入し、現地調査を開始する。
- 10日 調査区内に排水用溝を設定し、人力で掘削する。
- 11・12日 機械による表土除去作業と排水用溝を掘削する。
- 18日 機械による表土除去作業を一旦完了する。グリッド杭を設置する。
- 19日 調査区内南部より人力による粗掘り作業を開始する。
- 22・23・24日 C3・4区を粗掘り作業する。

- 25日 C 1・2 区を粗掘り作業する。
- 26・29日 現地調査中止。
- 30・31日 C 2・3 区を粗掘り作業する。
- 9月1日 C 4 区を精査し、溝SD-9・12・13を検出し、その掘削を行なう。
- 2日 現地調査中止。
- 5日 C 3・4 区を精査し、掘立柱建物跡SH-1や溝SD-4～8を検出し、その掘削を行なう。
- 6日 C 2・3 区を精査し、柱穴、土坑SK-1～3、溝SD-2、井戸SE-1や水田遺構を検出した。そしてこれらの掘削を行なう。
- 7・8日 C 1・2 区を粗掘りし、精査し、柱穴を検出し、その掘削を行なう。
- 9日 C 3・4 区を粗掘りする。
- C 2 区を精査し、柱穴を検出し、その掘削を行なう。
- 12日 A 2・3 区、B 2・3 区の粗掘り作業を行なう。
- 13日 B 3・4 区内の排水用溝を掘り下げる。
- 14日 現地調査中止。
- 16日 雨天のため現地調査中止。
- 19日 排水作業を行なう。
- 20日 A 2 区、B 2・3 区の粗掘り作業を行なう。また同区の排水用溝を掘り下げる。
- 21日 A 3 区、B 3 区を精査し、



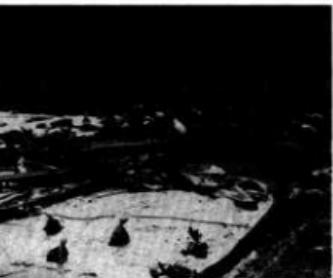
調査前



表土剥ぎ



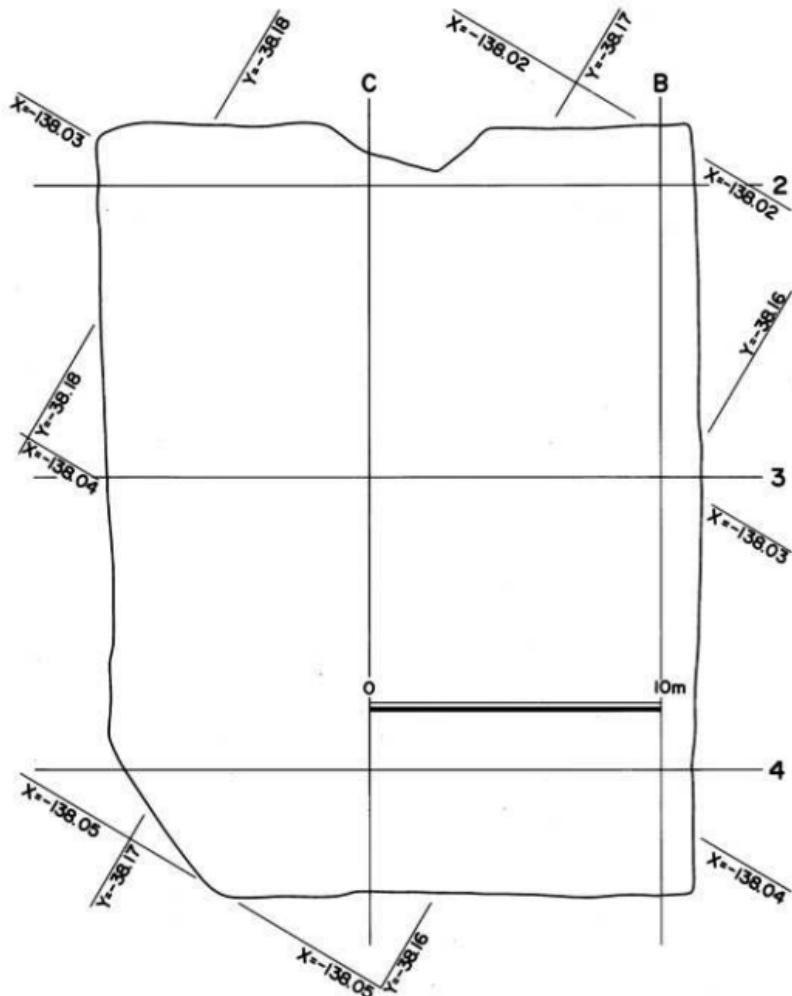
排水路掘り作業



発掘作業風景

柱穴を検出し、その掘削を行なう。

- 22日 A 2区、B 2・3区で機械による2度目の表土除去作業を施す。
B 2・3区を精査し、柱穴や溝SD-3を検出し、その掘削を行なう。
- 23日 B 4区にSD-1を截ち割るサブトレーンチを設定し、その掘削を行なう。



第2図 グリッド配置図

開始する

- 24日 排水作業を行なう。
- 26日 B 4 区の S D - 1 を裁ち割るサブトレンチの掘削を続行する。B 1・2 区、C 1・2 区を精査し、柱穴などの追加検出に努める。遺構は検出しだいただちに掘削する。
- 27日 S D - 1 の断面を清掃し、計測・写真撮影を行なう。S D - 1 の掘削を開始する。
- 28日 S D - 1 を完掘する。
- 29日 排水作業とともに調査区内の清掃作業を行なう。また発掘器材の一部を撤収する。
- 10月 1 日 高所作業車から写真撮影を行なう。また遺構ごとの完掘写真撮影を行なう。
- 2～5日 完掘状況を計測し、残る発掘器材の全てを撤収し、現地調査を完了する。

方 法 (第2図)

調査は、宅地造成計画944m²のうち攢乱を除く、建物及び道路部分480m²を発掘調査の対象面積とした。調査方法は、機械により表土ならびに耕作土を除去した後に、人力により掘削・精査・写真撮影・測量の順に行なった。

測量用の基本杭は、地形や調査区の形に合わせて、発掘区内を10m方眼のグリッドに区切り、このグリッドを基準に発掘調査を実施した。杭の東西列を東からA・B・C・・ラインとし、南北列を北から1・2・3・・ラインと呼ぶことにした。各ラインの交点にあたる北東コーナー杭をグリッド名とし、たとえばB 2 区と呼ぶことにした。グリッド基軸の方位はN -30° 6' 00" -Wで、グリッド杭は国家座標にプロットした。

現地での作図は、基本的に20分の1の縮尺を原則として必要に応じ10分の1の縮尺で行なった。また、遺物包含層出土遺物は、極力出土位置を計測し、後日室内でドットによる作図を行なった。

標高測量は、発掘区内に仮BM (20.081m) を設定し基準点とした。調査に伴う写真撮影には、6×7cm判カメラ（白黒フィルム）と2台の35mm判カメラ（白黒フィルムとカラーリバーサルフィルム）を使用した。撮影は、遺構を清掃したのち、やぐら4段を組んだローリングタワーで斜め上から、または高所作業車を用い、上空から撮影した。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

堀田東遺跡はJR菊川駅より南西へ約650mに位置し、標高約20mである(第1表-14、第3図)。西方川によって形成された沖積平野に立地し、あたりは水田とこれを埋め立てたうえに住宅が点在する。この沖積平野は、東西を高田ヶ原段丘と掛川段丘にはさまれた幅の狭く、軟弱な地盤である。

西方川は一級河川で西方地区最北部の掛川市と接する付近に流れを発する。同地区的公文名・島川を以て、本遺跡の西北部で蛇行し加茂地区へ向かう。周辺の地質は第三紀鮮新世の掛川層群中の堀ノ内互層からなる。軟質な砂岩と泥岩の互層のため、浸食されやすく開析が進行し樹枝状に谷が広がる。これらの谷に深部にはため池が造られ、谷底は埋積谷、谷底平野となっている。過去の調査で、堀田遺跡から豆尻遺跡周辺で川の氾濫を示す數メートルの堆積が確認されている。本遺跡付近でも沖積層は数メートルの層厚を測る。

西方川流域にヒトが住み始めたのは縄文時代である。本遺跡東方にある高田ヶ原遺跡(7)や鹿島・打上遺跡(10)に見られるように、やや小高い丘陵上に認められる。高田ヶ原遺跡では、常葉短期大学の建設に伴う調査で中期の住居跡が確認された。報告書未刊のため詳細は明らかでないが、周辺でもっとも古い時期のものと考えられる。

その後丘陵上には、弥生時代後期まで断続的に小規模な集落が営まれる。そして弥生時代後期から古墳時代前期にかけてさかんに住居が造られ、集落としてのピークを迎える。こうした傾向は西方川流域に限らず、三沢西原遺跡・長池遺跡など町内の他の遺跡にも当該期には同様の高所に所在する傾向がみられる。古墳時代以降この丘陵上は集落の舞台から高田ヶ原古墳(8)など墓域へと移行し、集落の中心は丘陵西裾の沖積平野へ代っていく。墓域としては、横穴墓の大淵ヶ谷横穴群(1)も見られる。

弥生時代中期ごろから沖積平野にも生活の跡が見られるようになる。代表的な遺跡として白岩遺跡(11)がある。嶺田式土器など古い時期の土器が発見されている。白岩遺跡は西方川流域の弥生時代の中核的な遺跡である。昭和41・48・57・62年に調査

番号	遺跡名	時代	位置	備考	番号	遺跡名	時代	位置	備考
1	山本大淵ヶ谷横穴群	古 墓	西方堀田	昭和44年調査	8	高田ヶ原遺跡	古 墓	半渕高田	
2	堀田城	中 世	~	平成5年調査	9	大徳寺古墳	古 墓	~	
3	堀田遺跡	弥生~近世	~	平成元、5、6年調査	10	鹿島・打上遺跡	縄文~古墳	半渕打上	平成3年調査
4	堀田北遺跡	弥生~古墳	~		11	白岩遺跡	弥生~縄文	加茂白岩	昭和41、62年調査
5	豆尻遺跡	縄文~室町	~	昭和60、61年調査	12	正法寺古墳	古 墓	西方堀田	平成5年調査
6	栗林遺跡	弥生~室町	~						
7	高田ヶ原遺跡	縄文~奈良	半渕高田	昭和45、61年調査	14	堀田東遺跡	弥生~室町	西方堀田	

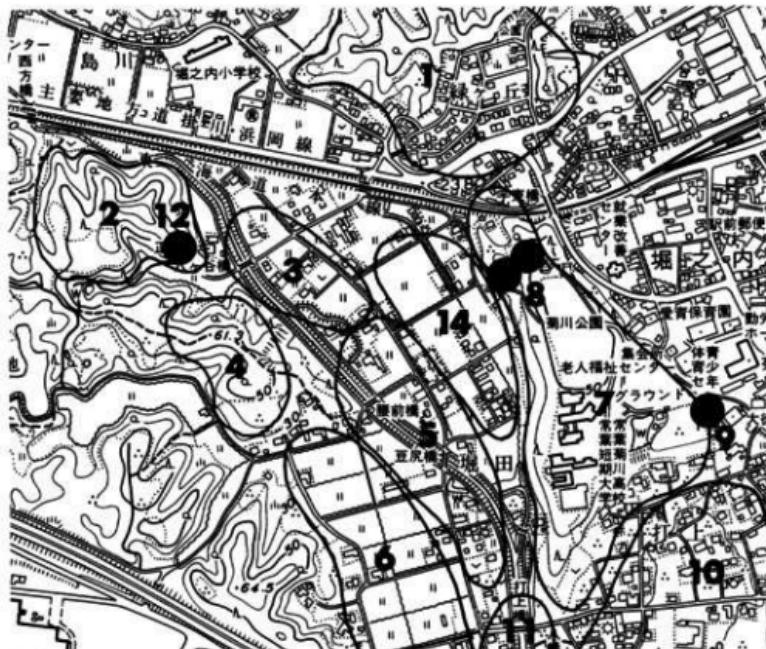
第1表 周辺遺跡一覧表

された。これらの調査で弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡であることが確認された。昭和41年の調査では弥生時代の住居跡が検出された。また、農耕具などの木製品が多数出土し、当地域の農耕文化を知る好資料を提供した。

古墳時代では、正法寺古墳（12）や弥生時代から始まる堀田北遺跡（4）もある。奈良時代から平安時代にかけては、豆尻遺跡（5）や堀田遺跡（3）が挙げられる。豆尻遺跡は弥生時代中期から室町時代にかけての複合遺跡で、昭和60・61年に調査された。61年に古墳時代から平安時代の住居跡が見つかり、この時期にもっとも栄えた集落跡であることが明らかにされた。またその南には、弥生時代から室町時代の栗林遺跡もある（6）。

中近世の遺跡としては、堀田遺跡の北に拈花山正法寺がある。その裏山に中世の城郭跡のある堀田城がある。堀田城は、平成5年の調査で曲輪の一部が確認された。付近には、堀之内、公文名などの中世に関連する地名も残っている。

以上この沖積平野は、弥生時代中期以降に人々の生活の場となった。今回の堀田東遺跡の発掘調査では、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が検出された。周辺遺跡とともに当地域の歴史を解明する一つの資料を提供したと言えよう。



第3図 遺跡の位置と周辺遺跡

第Ⅲ章 調査の概要

層位(第4図)

基本層位はつぎの5層に識別できた。

- I層 暗茶褐色砂礫土層(現代の盛土)
- II層 暗茶灰褐色粘質土層(近・現代)
- III層 暗黒灰褐色粘質土層(中世の耕作土)
- IV層 暗灰褐色粘質土層(中世)
- V層 灰青褐色粘土層(基盤層)

I層は現代に客土し、整地された盛土層である。層厚は8~20cm。II層は上面で、近年まで水田耕作が行なわれていた耕作土である。層厚は72~88cmである。両層は重機により掘削し除去した。この段階で若干の遺物が混在した。III層は中世の耕作土である。山茶碗が含まれ、層厚は4~14cmである。IV層は灰釉陶器、山茶碗、土師質土器が含まれる土層である。層厚は8~22cmである。V層が基盤層である。検出直後は灰青色を呈する粘質土層であるが、日を追うごとに管鉄の酸化が進行し、表面は赤褐色になり全体に黄褐色に変化した。本層上面は東から西に緩やかに下降する。南北は南に緩やかに下降する。V層上面より8cmほどまで掘り下げた。

遺構はV層を掘り込む状態で落ち込みが確認できる。しかし遺構検出面には、多少のばらつきがあった。調査区西側はIV層下部上面(V層上面より数cm上)を精査すれば、ほとんどの遺構が検出された。一方、SD-1を含め調査区東半分では、IV層下部上面での検出は視覚的に困難だった。このため東半分では、V層上面まで掘り下げて、ほとんどの遺構が検出された。

調査区中央部にはSD-1が南北に横たわる(第6図)。この埋土は基本層位のIV層と色調・質ともに酷似しているばかりか、調査区東半分に広く堆積していた(第5図)。このため東半分では、V層上面に至ってはじめて遺構検出が可能となった。

最終的には、IV層下部を取り除き、どの位置もV層上面まで掘り下げ、面を揃え遺構確認面とした。

遺構(第6図)

検出された遺構は、井戸(SE)1ヶ所、土坑(SK)3ヶ所、掘立柱建物跡(SH)1棟、水田遺構1ヶ所、溝(SD)13ヶ所、柱穴(P)62本、性格不明遺構(SX)1ヶ所である。各遺構は奈良時代から江戸時代のものと思われる。

0m

I 暗茶褐色砂礫土(現代の盛土)

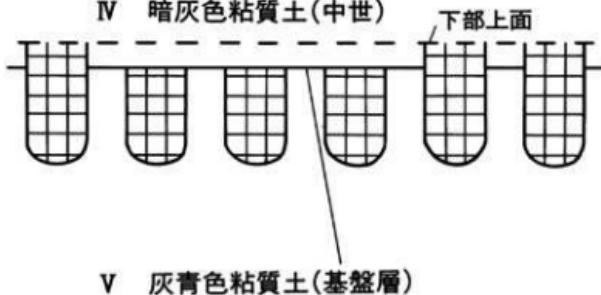
II 暗茶灰褐色粘質土(近・現代)

-1m

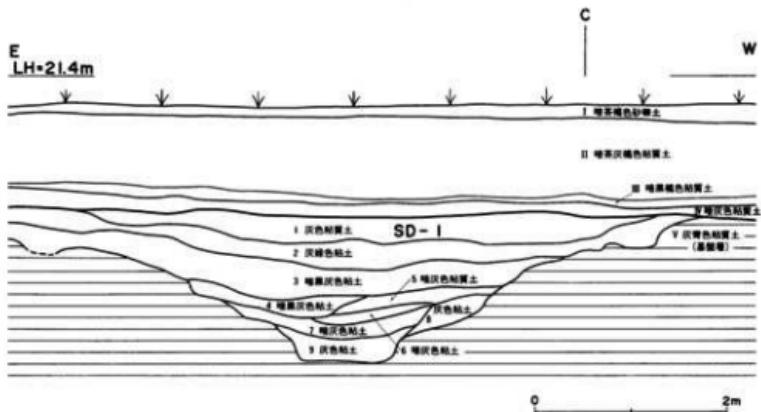
III 暗黒褐色粘質土(中世の耕作土)

IV 暗灰色粘質土(中世)

下部上面



第4図 土層模式図



第5図 南壁土層図（中央はSD-1土層図）

調査区の地形は、北から南に緩やかに下降している。東西はところどころ凹地となっているが、ほぼ平らである。西に行くほどに遺構が多く分布している。

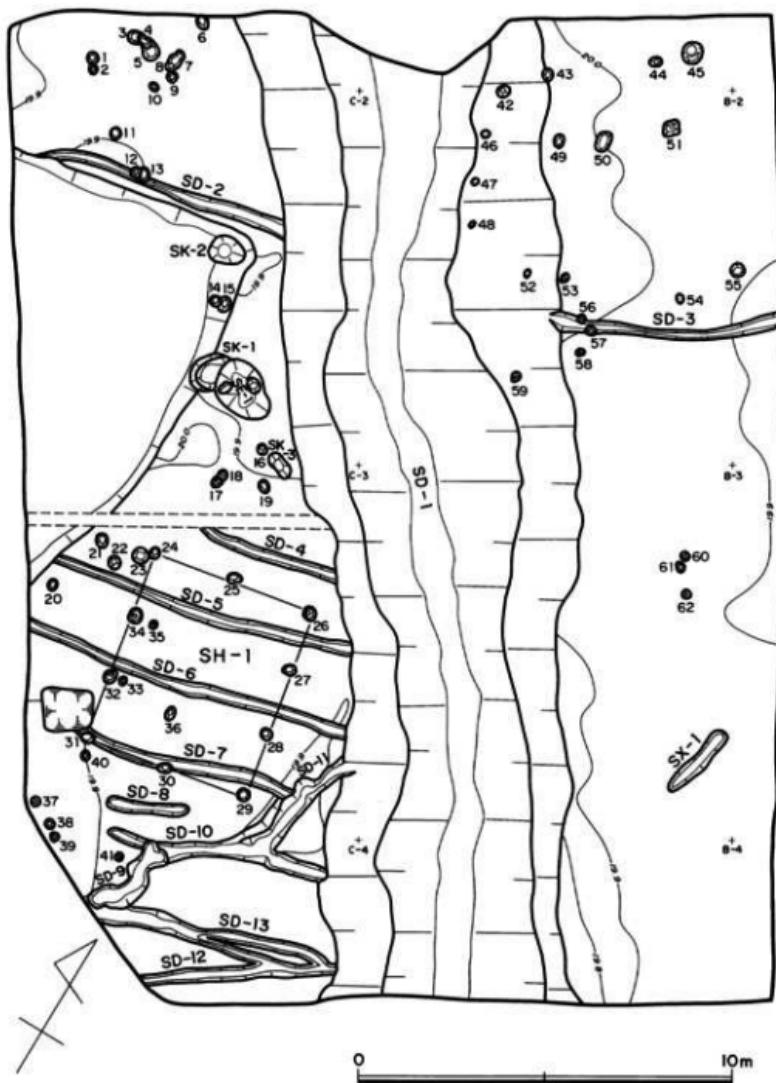
以下、遺構ごとに記述する。

SD-1 (第5・6図) 調査区中央部に位置する。いくぶん東に傾きながら南北に伸びる。規模は、幅7m、深さ3mと大溝である。地形が南に傾斜し下降していることや堆積状況から判断して水は南流していたであろう。埋土の堆積状態は比較的安定している。こうした状況から判断して自然流路とは考えにくい。溝の下層から中世の陶器類が出土しており、この時期に掘削されたものと考えられる。溝の性格は濠（堀）で、その一部を検出したものと思われる。

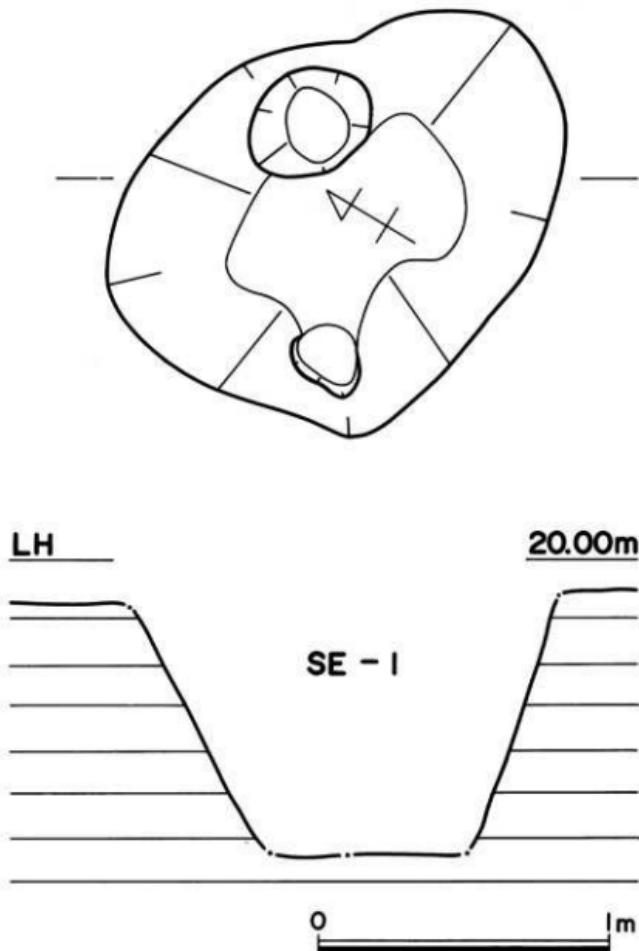
SD-2・3 (第6図) A2からC2に位置する溝である。東西に伸びる両遺構は、一つの遺構と考えられる。溝の北側には柱穴が点在し検出されていることから、屋敷地の区画溝と考えられる。後述する水田遺構により断ち切られていることや出土遺物から判断して、平安時代の溝と思われる。

SD-4～13 (第6図) C3・4区に位置する。複数の窪みが互いに並行して東西に伸びる溝状遺構である。埋土から志戸呂焼などの陶器が出土していることや、掘立柱建物跡 (SH-1) を分断するようにこれらの溝が東に伸びていることから江戸時代の烟の畠と考えられる。

SE-1 (第7図) 井戸は調査区中央部C2区にあり、SD-1の西岸に近いところに位置する。素掘りのもので平面形は不正円形である。規模は長径180cm、短径50cm、深さは検出面より95cmを測る。断面は平坦な底部と緩やかに広がりながら立ち上がる壁面によりなる。遺構中央部の東西各1ヶ所に小穴状の窪みが見られる。



第6図 全体図



第7図 SE-1 実測図

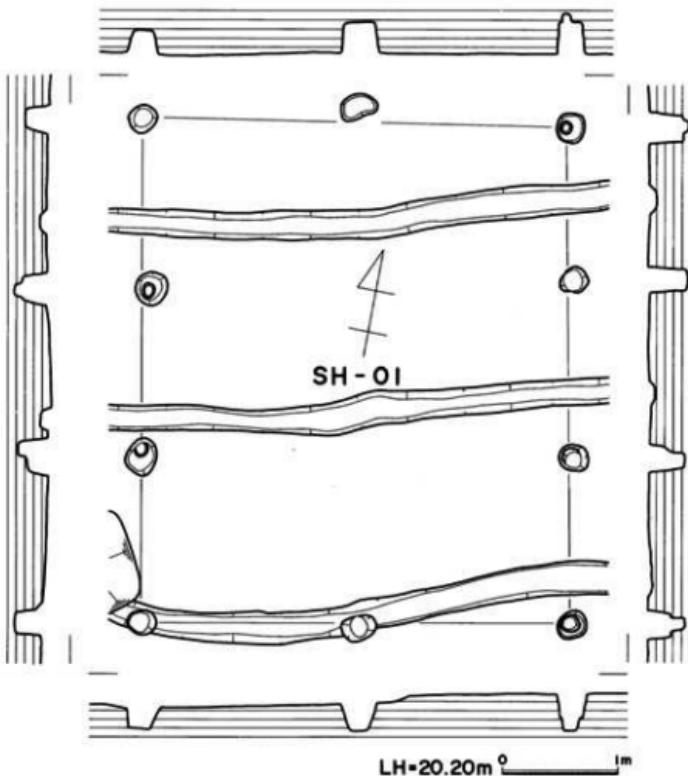
埋土は暗灰色砂質土で、底部へ近づくほどにいくぶん砂質を増した。板枠等の痕跡は確認されなかった。また遺物は出土せず、自然礫が検出されるに留った。遺構の年代は水田遺構や溝SD-1とのあり方から判断して、中世のものと思われる。

SH-1（第8図）C3区中央部に位置する。間口2×3間の南北に長い長方形の建物である。立替えをの痕跡を示す柱穴の掘り替えは見当たらない。柱根が残存していたり、根石と考えられる自然礫が内部に残っている柱穴はなかった。規模は桁行

き4.4m、梁行き3.8mを測る。桁行きの柱間隔は1.5mである。柱穴の形状は円形で径25~30cmほどである。底面の標高は19.7m前後である。建物の主軸方位はほぼ北をさす。

埋土は一層で暗灰褐色粘質土である。柱穴から出土した遺物や、埋土の色、そして過去に周辺の調査で確認されていた掘立柱建物跡のなどから判断して、奈良時代末から平安時代初頭の建物跡と考えられる。またSD-4~13が本遺構を分断するように東西に伸びていることも、本遺構がこれらより古い時期のものであることを示すと思われる。

水田遺構（第9図） C2・3区に位置する。調査区外の西側に全体のうちのおよそ半分は埋もれたままである。調査区を拡張して全容を確認できなかった。角張った平面形をなし、方形か長方形と思われる。東西、南北の両方向にほぼ並行する両辺は



第8図 SH-1 実測図

は約80°の角度で屈曲している。水田遺構の主軸は北をさす。断面形は浅い皿状を呈する。東西は東端の立ち上がりから底部にかかり緩やかに西へ下降する。南北はほぼ平坦で、北端に至ってわずかに立ち上がる。

埋土は暗灰褐色粘質土で一層からなっていた。炭化物や植物等の纖維質のものは検出されなかった。こうした安定した堆積状態から判断して、かなり短期間で埋没したものと思われる。

遺物は床面より山茶碗が出土している。また、水田遺構の北側にある東西に伸びる溝SD-3を断ち切っている。この溝は平安時代の遺物を検出している。以上のことから判断して平安時代よりも新しい時期の遺構と考えられる。

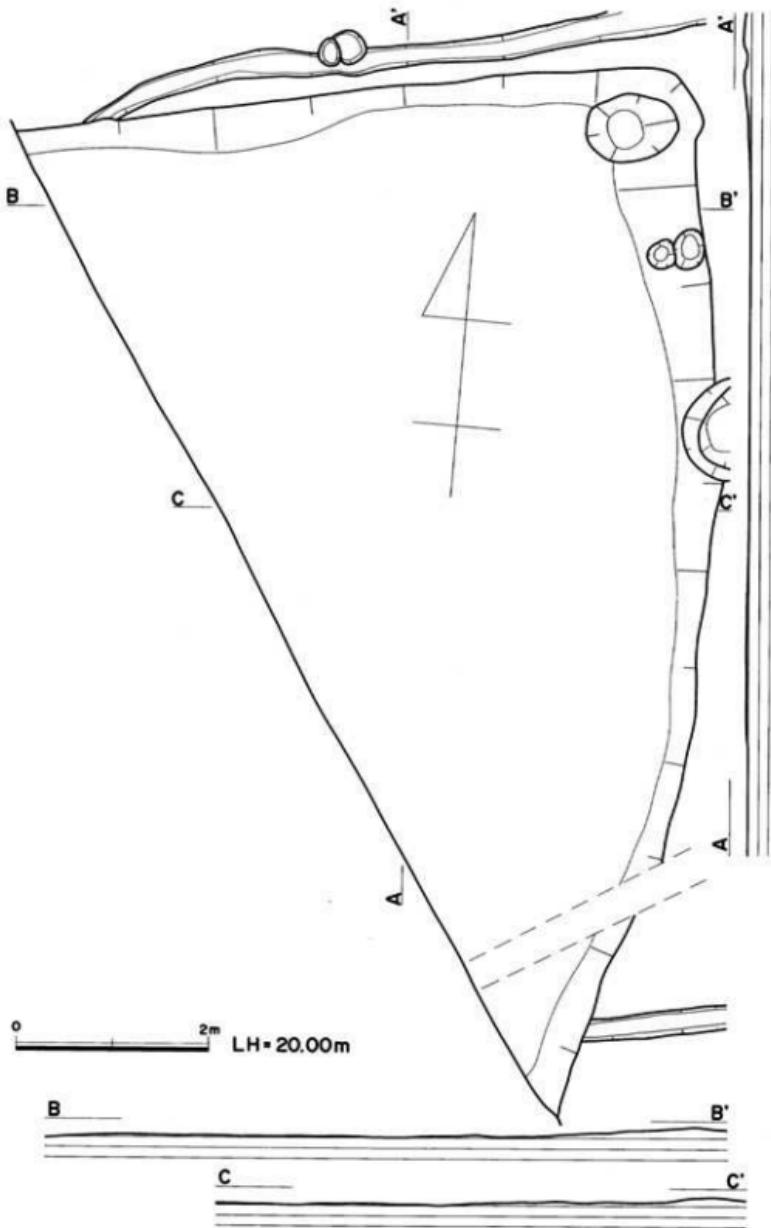
水田遺構と判断したのは、遺跡が低湿地に存在し、その形状があたかも一枚の水田を推測させるからである。しかし、小畦畔と思われる高まりは見られない。また底部に、足跡や稻株痕や耕作具による痕跡も見られなかった。堰や水路、水口といった遺構も調査区内では検出されなかった。各種の自然科学分析は行なわず、プラント・オバール分析もへていない。

SK-1(第6図) C2区東南部に位置する。平面形は、東側がSE-1に断ち切られているが、残存する部分から推測すると梢円形の土坑であろう。規模は、長径160cm、短径90cmである。検出面より深さ48.5cmを測る。掘り方は法面の途中に段をもつ。底の形態は長径70cm、短径50cmと上端同様に梢円形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土1層である。遺物や炭化物等は含まれなかった。遺構の年代は明確でないが、SE-1との切り合い関係から判断して、これと同じ時代かそれ以前の時期のものと考えられる。遺構の性格は、一応土坑としたが素掘りの井戸の可能性もある。

SK-2(第6図) C2区中央部に位置する。平面形が卵型の梢円形の土坑である。規模は、長径100cm、短径75cmである。検出面より深さ31cmを測る。掘り方はゆるやかな勾配で直線的である。底の形態は直径35cmと円形を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土1層である。遺物は含まれなかった。遺構の年代は、水田遺構を断ち切っている切り合いから判断して、これと同じ平安時代以降のものと思われる。

SK-3(第6図) C2区東南隅に位置する土坑である。平面形は不正円形である。規模は、長径75cm、短径35cmである。検出面より深さ17cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土1層である。遺物は含まれず、遺構の年代は明確でない。遺構の性格は、周辺に密集している柱穴と関連のある施設の一部と思われる。

柱穴(第6図) 全部で62本検出された。柱穴の分布は、主にSD-1をはさんで西側とSD-3の北側に見られる。掘立柱建物跡として把握されたのはSH-1が1棟だけである。SH-1付近に分布する柱穴に顕著な並びは見られない。一方SD-3の北側では、SD-1の東岸法面にあるP46~48の3本が等間隔で並びを呈する。建物かそれに関連する塀などの遺構と思われる。



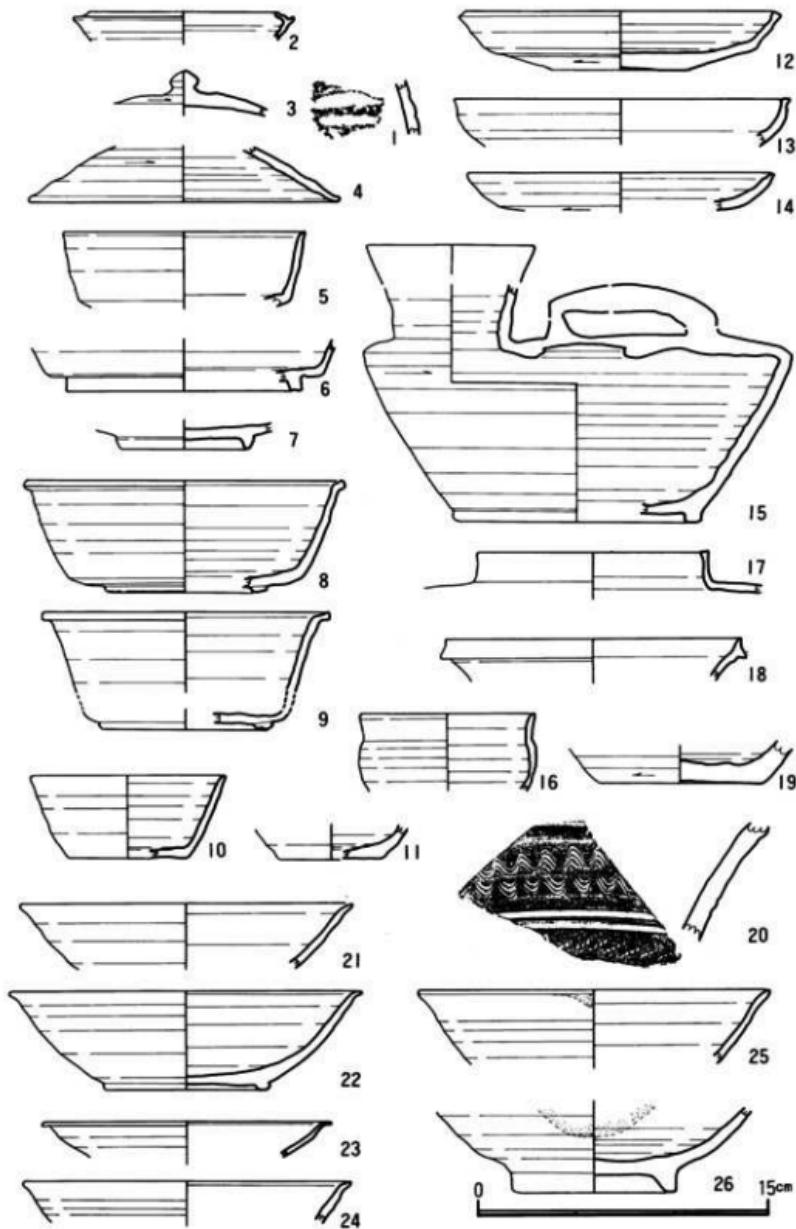
第9図 水田造構

遺物

今回の調査では、ボリコンテナに5箱分遺物が出土した。出土遺物は弥生時代から中世のものであり、石器が数点出土した以外は、全て土器である。土器には弥生土器、須恵器、縄輪陶器、灰釉陶器、山茶碗などがある。図示した資料は破片が多く大溝内より出土した以外は、覆土内より出土したものである。

弥生土器（1） 1は壺の破片で、大溝の最下層の底面より出土したものである。器面は摩滅しているが、横位に2条の太い沈線文と、縦位に条痕文が施されている。色調は灰茶褐色で胎土には赤石酸化土を含んでいる。年代は中期の嶺田式土器で堀田遺跡や白岩遺跡など西方川流域内遺跡に類例が多くみられる。

須恵器（2～20） この類には古墳時代後期～平安時代前葉にかけてのものがみられる。合子状坏身で口径9.6cm、最大幅11.3cmを測る。立ち上がりは低く短いのが特徴で7世紀中葉のものであろう。3・4は坏蓋である。3はかえり付坏蓋の破片である。ツマミは径1.4cm、高さ0.8cmで宝珠状を呈する。かえり部は欠損しているが、7世紀中葉。4は受部を体部から直線的にし、端部を折り曲げないもので坏蓋類の中では新しい時期に属する形状のものである。口径は18cmを測り焼成は硬質である。年代は9世紀前半であろう。5は無高台の坏身の縁部である。口径12.4cmを測り、口縁部口唇部内面を鋭角に面取りし、体部を直線的にするものである。8世紀後半～9世紀前半であろう。6・7は有高台坏身である。6は方形の高台が「ハ」の字に付けられ底部をヘラ削りしている。7は底部径6.4cmと小形のものである。いずれも8世紀後半の製品であろう。8～11は無蓋付坏身である。8・9は有台のもので全体に箱形とし口縁部を著しく外反させ、口唇部を方形にするものである。底部から体部下半部にかけて丁寧なヘラ削り調整されている。法量は8が口径16.0cm、器高5.7cm、底部8.2cm、9が口径14.6cm、器高推定6.0cm、底部8.8cmを測る。10・11は無高台で底部から口縁部が直線的に外反する。底部は平底で、回転糸切り未調整を有する。法量は口径10.0cm、器高4.2cm、底部6.0cmを測る。年代は8・9が8世紀末で10・11が9世紀前半である。12～14は皿で、底部から体部にかけてヘラ削り調整を施し、全体に弓張り状を呈する。12は底部から口縁部にかけて、明瞭に屈曲し、口縁部を外反させて端部を面取りしている。法量は、口径15.7cm、器高3.0cmと小形なものである。13は口縁部を直立させ端部を水平にし、断面が三角形状を呈する。14は口縁端部を丸くおさめている。12～14の年代は7世紀後葉であろうが12は坏蓋かもしれない。15は水滴である。体部は台形状となり方形の高台を有する。体部外面には灰釉が施されている。また体部上半部より底部にかけてていねいなヘラ削り調整が行なわれている。9世紀末から10世紀前半のものであろう。16は鉢である。口縁部は垂すぐし端部はナデ調整され丸く仕上げられている。大きさは口径8.8cmを測る。17は短頸壺の口縁部である。口縁部は直立に立ち、端部は水平にし断面を方形状となっている。18は長頸瓶の口縁部で



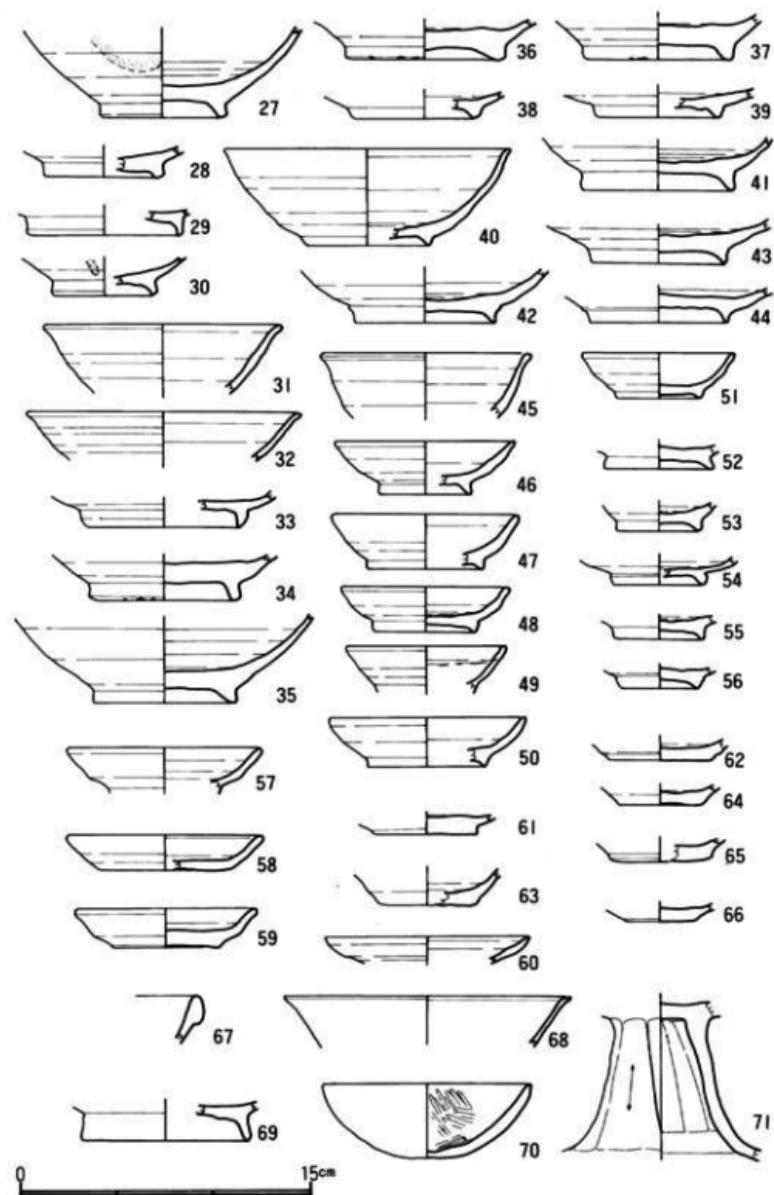
第10図 出土遺物1

断面が三角形を呈する。19は壺の底部である。17~19の時期については、8世紀後半から9世紀前半のものである。20は壺の口縁部である。口縁部下に凸帯を配し、口頸部を沈線で区画した上部に波状文、下部に列点文が施されている。8世紀前半であろう。

緑釉陶器 (21) 21は口縁部の破片で、表面は摩滅しているが緑釉が薄く残っている。口縁部はまっすぐ外傾させ端部を尖らせる。法量は、口径17.0cmを測る。全形を知り得る資料ではないが、黒窓90号窯式平行期のものであろう。

灰釉陶器 (22~30) 22~29は碗で22以外はすべて小片である。22は方形の小形の高台を有し、底部から口縁部にかけて曲線をえがき外傾する。口縁端部は強く外反させる。胎土は緻密で焼成は良好である。大きさは口径15.7cm、器高5.0cm、底部8.2cmを測る。23は口縁部を強く外反させ、端部を薄くしている。大きさは、口径14.8cmで小形のものである。24は口縁端部を強く屈曲させ断面を三角形状にしあげている。法量は口径16.6cmを測る。26・27は方形の高台を有するもので体部に漬け掛けの痕跡が認められる。色調は灰白色で焼成は良好である。各底部の大きさは、26が8.3cmで27が6.5cmを測る。27は大溝内下層より出土している。28は方形の高台を有し、大きさは径5.8cmである。29は爪形状の高台を有する。30は小碗の底部で高台が「ハ」の字に外側に張り出している。法量は径5.0cmを測る。年代については、22・23はこの類の中では古いタイプのもので黒窓14号窯式平行、24が黒窓90号窯式平行、25と29・30が折戸53号窯式平行、26~28・30が百代寺窯式平行ではなかろう。

山茶碗 (31~66) 今回の調査でもっとも多く出土している土器で、山茶碗、小碗、小皿の器種がある。山茶碗は生産地によって東遠江系とそれ以外の2つに分けることが可能である。31~38は色調が灰白色から灰色で胎土が緻密な湖西・渥美など東遠州より西の産地の製品である。31は口径11.0cmと小形な碗である。32は体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながらまっすぐのび、口縁端部を外反させている。口径は17.0cmで、口径に対し器高の低い浅い碗である。33は爪形の高台を有するものである。34は方形の高台にモミ痕が残る。35は高台が断面三角形を呈し、「ハ」の字状に外側に張り出している。高台には砂目痕が残る。36・37の高台は方形に近いが粗雑な作りでモミ痕が顕著に残る。38・39の高台は低く台形を呈し、端部を強くナデしている。31~33は山茶碗でも古い特徴を残すもので山茶碗期I期前半に属するものであろう。32・33は灰釉陶器の可能性も強い。34~37は高台の特徴やモミ痕を顕著に残すことから山茶碗期II期、38・39は山茶碗期IV期を考えられる。40~44は東遠州系のもので色調は、灰青色か灰色で全体に青味が強く須恵器に類似し、半円形状の体部に尖った高台を有するなど皿山古窯の製品の特徴を示す。40は唯一全形を知り得るもので、大きさは口径14.4cm、器高4.9cm、底部6.3cmを測る。41~44は底部の破片で、大きさは41が9.7cm、42が7.2cm、43が6.8cm、44が7.0cmを測る。44は大溝内から出土している。また高台に

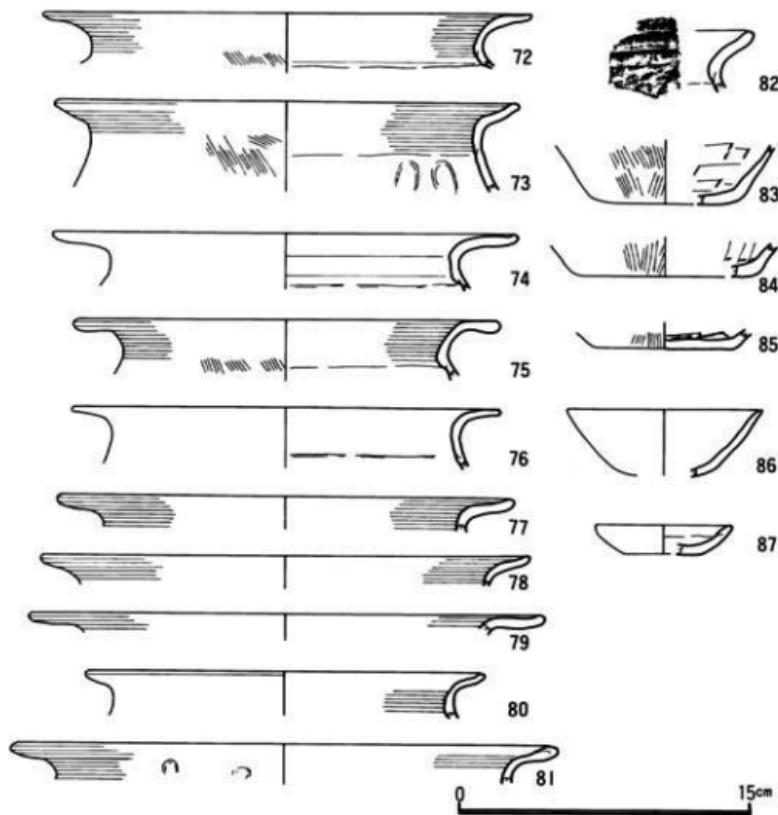


第11図 出土遺物 2

はスノコ痕が認められる。年代については、小片のため正確な特徴が把握できないが41は山茶碗期Ⅰ期で他はⅢ期であろう。小碗は45~56の12点である。大きさでは、口径が45の10.4cm以外はすべて口径10cm以下である。器高も2~3cmと低い。体部に明瞭な稜線がなく口縁部が直線的に外傾し皿状となる。色調は61以外は灰青色となっている。底部はほとんどが回転糸切り未調整を有する。高台は粗雑な三角形状のものと有するものが多く、比較的丁寧な作りの46・47や半円形状の52~54がある。また53には砂目痕が認められる。年代は山茶碗期Ⅰ期のものであるが45・46・52・54はこの類の中では古い特徴をもつものである。小皿は、57~60の11点である。58以外の小皿は底部を回転糸切り後、未調整によるもので少し台状となっている。57・59の口縁部は体部から著しく屈曲させまっすぐ外反している。色調は灰青色で焼成は良好である。法量は57の口縁部9.7cm、器高2.4cm、底部5.2cm、59が口径9.0cm、器高2.0cm、底部5.4cmを測る。61~66は底部の破片で大きさは3.6~5.2cm前後のものである。58は扁平な器形で平らな底部からゆるやかな曲線をえがき口縁部を外反させている。色調は灰青色で焼成は良好である。大きさは、口径9.8cm、器高1.8cm、底部6.6cmを測る。60は底部が欠損しているため全体の器形を知り得ることはできないが58と同種の底部と思われる。口径は15.4cmと比較的大きく扁平なものである。年代は、59に代表されるように底部を台状となる形状のものは山茶碗期Ⅱ期実年代の12世紀後半で、58と同じ形状のものを山茶碗期Ⅲ期13世紀前葉であろう。

中国製陶器（67・68） 67は小片であるが白磁玉縁碗である。釉は、灰白色で透明である。素地は灰白色できめが粗い。68は白磁端反り碗である。釉は、淡緑茶灰色で透明である。素地は灰白色で緻密である。年代は12世紀後半から13世紀前半であろう。

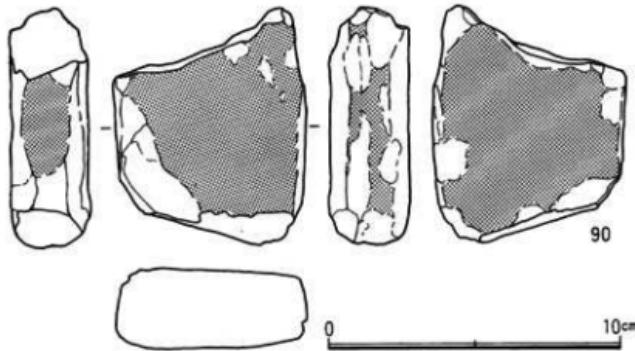
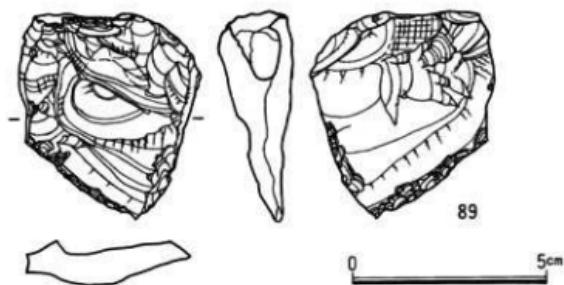
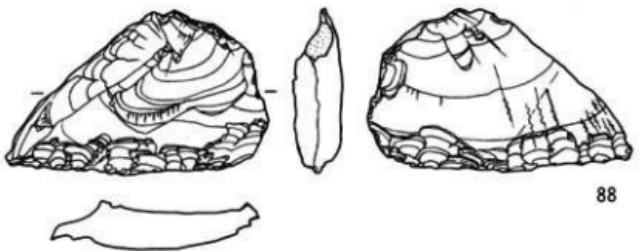
土師器（69~85） 蓋坏は69の1点である。蓋付有台坏身の須恵器は模倣したもので、高台は1cmと高く直立ぎみに立っている、表面は風化が激しいため調整方法は明らかでない。7世紀後半。70は坏である。体部は丸味を帯びた底部から湾曲しながら立ち上がり、口縁部も直立させ端部を尖らせる。内面は黒色でヘラ磨きされている。9世紀のものであろう。71は高盤の脚部である。脚上部は面取り整形し、丹塗りされている。年代は8世紀前半であろう。72~85は壺である。口縁部の形状で2種に分けられる。口縁部を水平になるほどに折り曲げるものと、強く屈曲させ「く」の字状にするものがある。前者は口縁端部をゆるやかに引きあげるか肥大させるもの72~79と内側に折り返し肥大させる81がある。72~79の壺は内外面にヨコナデ調整と体部にハケ目調整が施されている。81は口径は27.4cmと他と比較して著しく大きなもので壺の可能性もある。後者は80・82の2点である。80の一部にヨコナデ調整が認められる。82は表面にススが付着している。年代については、口縁部を「く」の字状にする特徴は古い形状のもので後者はやや「く」の字状がくずれているが前者より先行する器形と考えられる。よって後者が8世紀前半、前者が8世紀後半であろう。



第12図 出土遺物3

かわらけ (86・87) かわらけは碗状となる86と皿状の87の2点が出土している。86は底部は丸味を帯びまっすぐに脚を外反させ端部を尖らせる。大きさは口径10cmを測る。87はロクロ成形のもので色調が乳白色である。大きさは口径6.0cm、器高1.5cm、底部4.0cmを測る。調査区内の出土遺物から判断し13世紀後半とする。

石器 (第13図) 88は縄文時代の石匙と思われる。横長の剥片を素材にし、下端と腹面左縁上端に加工が施されている。加工は3~7mmを主体とし、1~3mmのものが連続し、大きさも揃っている。つまみを作り出した痕跡は見られない。打面に自然面を残し、打面縁端部には頭部調整痕が認められる。黒色の珪質頁岩製である。89は削器である。寸づまりの剥片を素材にし、加工は背面左右両縁と腹面左右両縁の下半に見られる。2~3mmを主体とし、連続する。背面左縁の加工だけは4~7mmの加工



第13図 出土遺物4

痕と1mmほどのものとからなる。88に比べ小さい加工痕が連続する。腹面右縁中央に見られる剥離痕は使用痕と思われる。背面は大小複数の剥離面からなり、ヒンジチャートとフィッシャーが顕著に見られる。打面縁端部には頭部調整剥離が認められる。黒灰色の珪質頁岩製で背面上面には灰白色の層理が見られる。時代は特定できないが、88と同様に縄文時代のものと思われる。

石製品(90) 90は磁石である。白色の流紋岩製で台形の平面形をなす。正面と裏

面は平坦でなめらかな摩滅面（図中網目部分）が認められる。左右両側面にも摩滅面が認められるが、上下両端には見られず割れ面を呈する。擦痕の向きは不明瞭であるが、白い石英の光沢や黒い雲母の斑晶が認められる。右側面の数ヶ所に剥離痕が見られるが、いずれも稜線は摩滅し丸味を帯びている。上下両端にもこうした丸味は認められる。このことから、手のひら大になった後も、砥石として使用されたことが伺える。

第IV章 ま と め

今回の調査成果をまとめるとつぎのとおりである。

○全般に遺構は希薄で、主に中世の遺構が検出された。

○奈良時代から平安時代の遺構検出は、周辺の過去の調査で集落跡が発見されていたため、当初からその存在が推測された。しかし、掘立柱建物跡が1棟と建物跡が少なかった。これは、当該期においてこの地が集落の中心ではなかったことを示すものとして評価したい。

○平安時代の古手の灰釉陶器は、当時の役所跡や身分の高い人物の屋敷などに限られた社会で消費されたものである。それが西方川流域で今回の調査でも検出された。この付近が、当時重要な位置にある場所だったことがうかがえよう。

○中世の遺構は、今回の調査の最大の成果である。SD-1は、西方川流域に生活の中心をおく集団の屋敷地の範囲を示すものである。屋敷地の東端を明らかにしたものと思われる。このことは、当時の社会構造や生活空間を知る貴重な資料を提供したと言えよう。

○弥生時代の遺物が出土している。しかし遺構やその他の資料は検出されなかった。おそらく、周辺にこの時期の遺跡が存在することを示すものであろう。

なお本書の発刊ならびに調査を通じて、下記の方々から種々のご教示と協力を戴いた。末尾ながら記して謝意を表し御礼申し上げたい。

赤松 一秀 植山 茂 鈴木 忠司 工藤 敏久
進藤貴和子 竹内 直文 山崎 克巳 佐藤 達雄
西井 幸雄

参 考 文 献

- 菊川町教育委員会 1986 『豆尻遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第7集
“ 1988 『豆尻Ⅱ遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第13集
“ 1992 『鹿島遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第24集
“ 1991 『堀田遺跡』菊川町埋蔵文化財報告書第22集
“ 1994 『堀田遺跡Ⅱ』菊川町埋蔵文化財報告書第27集
“ 1994 『堀田遺跡Ⅲ』菊川町埋蔵文化財報告書第30集
“ 1995 『平成5年度文化財事業年報』菊川町文化財年報第1号
- 工農普通 1991 『水田の考古学』東京大学出版会
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『研究紀要IV』

報告書抄録

ふりがな 書名	ほったひがしいせき 堀田東遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	菊川町埋蔵文化財報告書						
シリーズ番号	第33集						
編著者名	後藤和風・塚本和弘						
編集機関	菊川町教育委員会						
所在地	〒439 静岡県小笠郡菊川町堀之内61 TEL 0537-35-0925						
発行年月日	西暦 1995年 3月 30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ほったひがしいせき 堀田東遺跡	おおさくらんまくいわちょう 小笠郡菊川町	22462	34度 45分 17秒	138度 4分 58秒	19940809 ～ 19941005	944	宅地造成 に伴う事 前調査
種別	主な時代	主な遺構	主な遺構	特記事項			
堀田東遺跡	集落跡	弥生 奈良 平安 中世	掘立柱建物跡 1棟 溝 1ヶ所 SD-2 土杭 1ヶ所 SK-2 溝 1ヶ所 SD-1 土杭 2ヶ所 SK-1 SK-3 井戸 1ヶ所 水田遺構 1ヶ所 溝 10ヶ所 SD 4~13	弥生土器 須恵器 縄文陶器 灰陶器 山茶碗、輪 入陶磁器、 土師器、かわらけ			

堀田東遺跡発掘調査報告書

1995年3月30日 発行

編集 静岡県菊川町教育委員会
発行 静岡県菊川町教育委員会
印刷 株式会社開明堂

写 真 図 版

写真図版 1

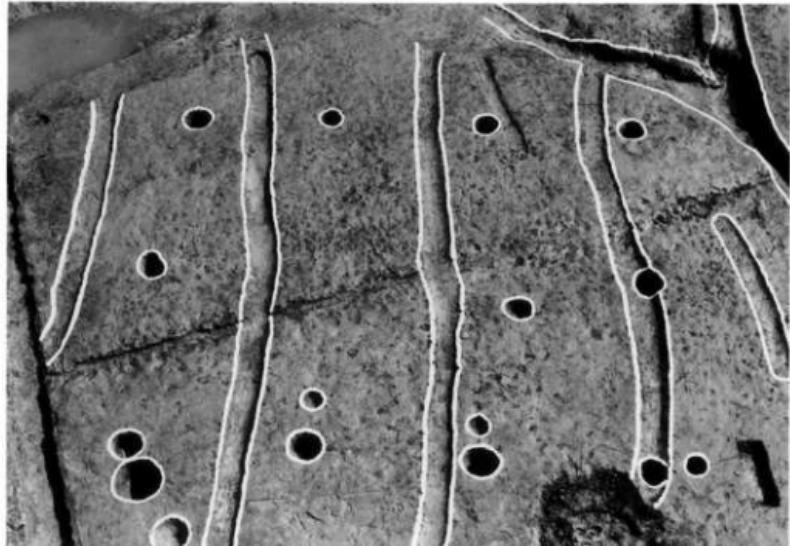


完掘状態（北より）

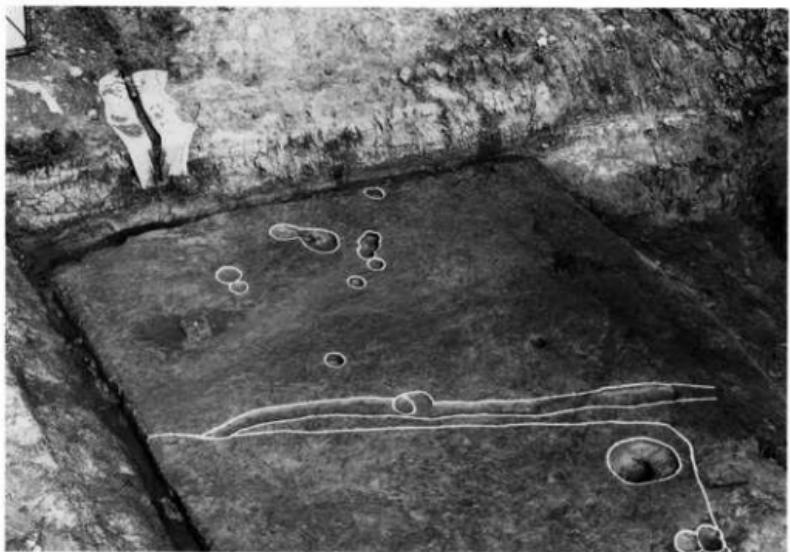


発掘作業風景

写真図版 2



S H - 1 完掘（西より）



C 3 区内柱穴（南より）

写真図版 3



水田遺構（南より）



C 3区内溝遺構（西より）

写真図版 4



B 2 区内柱穴（西より）



S D - 1 土層状態（北より）

2	3	4	5	6
		13		
7	11		16	17
	67	14		
21		18	19	20
	68			

24	32	31	30	29
28		27		25
23	33	38	39	

写真図版 5



出土遺物 1

26 34 35

36 37

41 42

43 44

写真図版 6

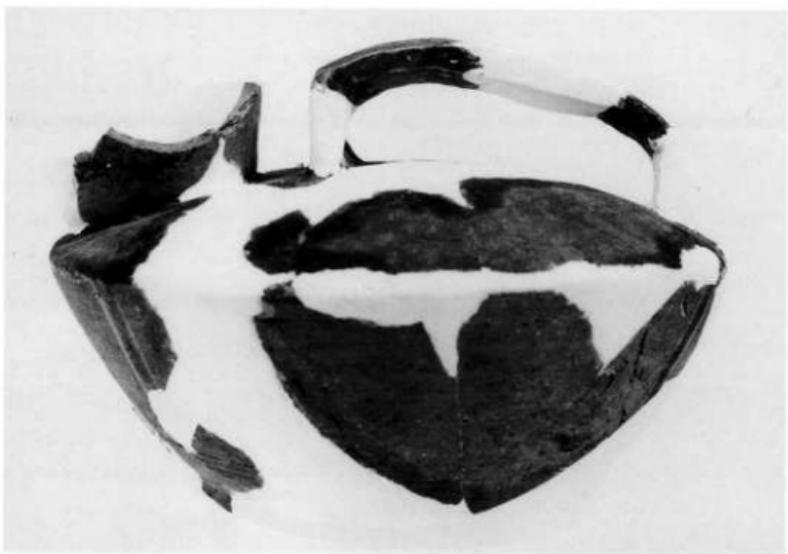


出土遺物 2



45	46	47	49	50	51
52	53	54	55	56	
	62		65		
58	61		64		
	63		66		

写真図版 7



出土遺物 3

8

60

7

48

12

57

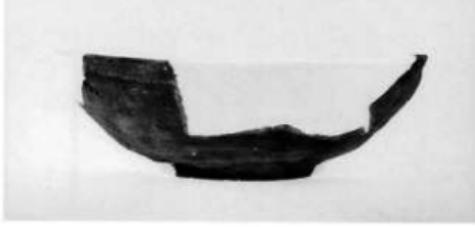
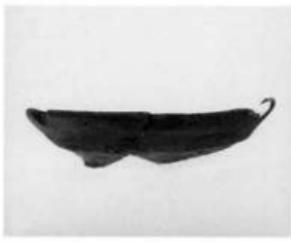
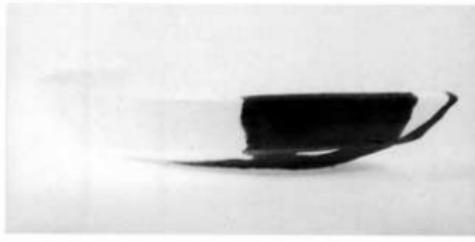
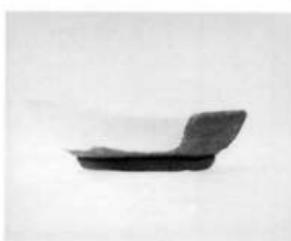
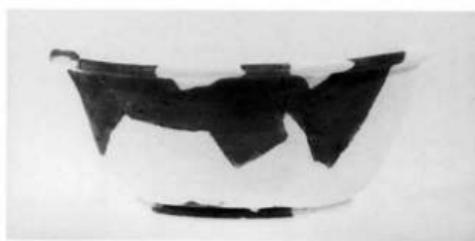
22

59

40

71

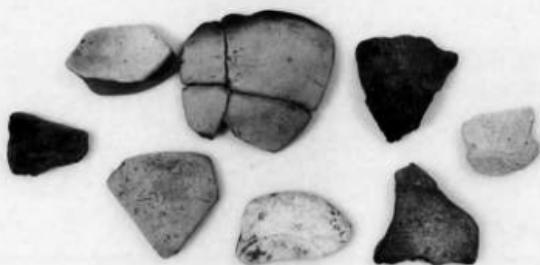
写真図版 8



	69	70	83
1			84
	86	87	85

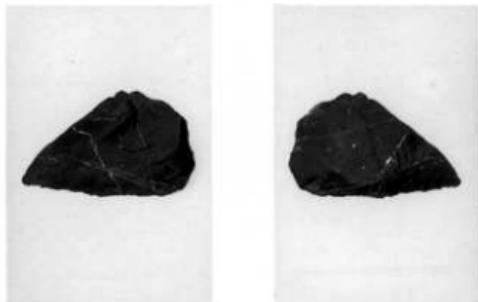
72	73	75	
74	76	77	78
79	80	81	82

写真図版 9

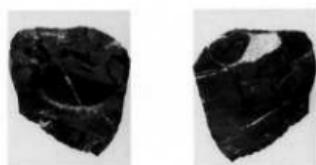


出土遺物 5

写真図版10



88: 搤 器



89: 削 器



90: 砥 石

出土遺物 6